

## 京都府総合計画策定検討委員会テーマ別会合（ゆめ実現分野） 議事内容

- 地域づくりや学生スポーツをテーマにお話をさせていただけたらと思います。京都は大学生の街というくらい大学生の人口が多いのですが、なかなか大学生と地域との関わりが見えづらいと思っています。私の経験で言えば、近くの農家で赤紫蘇の摘み取りなどの作業を行う際、学生がボランティアでお手伝いをし、スポーツ栄養学を専攻している大学の先生がその赤紫蘇を使って健康促進につながるような飲料を開発する。また、近年よく開催されているトライアスロン大会に、学生が実行委員として大会を企画し、救護や看護、ボランティアも含めて大会自体を盛り上げていくなど、学生を学外に出して地域と連携していくようなことを熱心にやり始めています。京都には学生がたくさんいるので、教室の中で座学をしているだけではなく、例えば中北部地区で地域と繋がる仕組みづくりができないかなと思っています。

以前も申し上げましたが、部活動の地域移行やそれに伴う廃校の跡地利用について、中学生だけではなく、高校生やシルバー層などの廃校の跡地利用を検討すればよいと考えています。京都では公園を見ているだけでも遊んでいる子供が少なく、むしろ東京の方が多く感じます。例えば廃校跡地のグラウンドに人工芝を設けるとか、体育館の利用を促進するなど、健康増進の目的を含めてそこに人が集まり、地域コミュニティを作っていくような取組みに関して、プロトタイプになるような地区を選定しながら進めていけばよいのではないかと考えております。

もう一つ、施設の活用という観点で言うと、亀岡に新しいスタジアムができました。私はサッカーが好きなのでたまに観戦に行くのですが、先般、川崎フロンターレとの試合があった際、京都駅にも川崎のユニフォームを着たサポーターがいっぱい来ているなど見ていました。ところが、その方たちはトロッコ列車にたくさん乗っていたそうです。京都では十分に観光客が来ていると思う人が多いかもしれませんが、亀岡市からみると、夜にはまた京都に戻ってしまうという難点はあるものの、スポーツ観戦を通じたスポーツツーリズムを盛り上げる余地がまだまだあるのではないかと考えています。

- 未来を拓く産業づくりについて、人手不足や後継者不足ということですが、私自身も京都の伝統産業についての知識が少ないなと感じました。そこで、大学生のときから伝統産業について深く関われる機会を設けることが大切だと感じました。例えば平安女子大学では春学期にいろいろな企業から課題をいただき、その解決策を大学生が考えるPBL事業（課題解決型事業）というものを行っています。例えば、着物店から、50年後着物はどうなっているかという課題を提示されて、それについて半年間考え、最終的には着るから見るに変わっていくのではないかと考え、メタバースで融合できないかという結論を出したのですが、やはりこの半年間、ものについて学ぶ機会がすごく増えて、実際に着物店に店舗見学に行かせていただいたり、中間発表の際にもいろいろなご意見をいただいたりして、京都の伝統産業について触れる機会ができて、とても有意義な時間だったと感じています。大学生の時に企業と連携する機会を設けていただき、京都の伝統産業など、色々なものに触れる機会を与

えることで、後継者不足が少しでも解消すればいいなと感じました。

- 今日のテーマである「未来を拓く産業づくり」、「文化の継承と創造」、「交流による新たな地域づくり」について、やはりこの三つが合わさって一つの方向性に繋がっていくのではないかと思います。特に交流は、プラットフォームという意味で言うと、人々が使って初めて設定を持ち、新しい活動が生まれます。その中で、そこにある文化のようなものが一つのシーズとなり、新たな環境が生まれることがイメージできるのではないかと考えます。特に産業をどう維持・発展させていくかという中で、論点の一つである人手不足や後継者不足については、例えば関西万博でいうと、アバターをどうやって人間社会に溶け込ませていくかといったことを議論しており、新しい技術を活用することが、部分的かもしれませんが解決策の一つになるのではないかと思います。

もう一つはスタートアップ支援について、どうもやはりシーズの方にどんどん力が偏っているように思っています。新たな産業の創出に向けてどのように社会課題を解決していくのかを考えますと、いかにシーズをニーズにうまく転換させていくかという視点と提示が必要なのではないかと思います。特にシーズを一生懸命やられている方であれば、逆にニーズがどういったところにあるのかという視点を持って提案し、ニーズとシーズをマッチングするような場が必要なのではないかと思います。人づくりで、また一方で農林水産業の活性化のような観点もありますが、社会課題を踏まえシーズに力を入れている方々にうまく提案していくような仕組みづくりも必要ではないかと思います。

- DXとスタートアップ支援について、京都府は大学や研究機関が多く、世界レベルのイノベーションを起こすポテンシャルがあると思いますが、そのポテンシャルが十分活用されていないと個人的には思います。私は京都大学を卒業したのでその経験から言いますと、起業に興味がある学生はたくさんいて、日本人の学生だけではなく、外国人の学生も多くいます。しかし、最終的には外国人材が起業に繋がっていないケースは多く、直面している課題が3つあります。

1つ目が一番大きいのですが、ビザの課題です。2つ目は言葉の壁。3つ目は人脈づくりです。まずビザについては、留学しながらスタートアップや起業の取組ができないかと考えており、その2つの活動の両立が1年ぐらいできれば、外国人の起業が増えるのではないかと思います。2つ目の言葉の壁については、全体的な英語教育。この課題は短期的には解決できないと思います。3つ目の人脈づくりは、大人の影響かもしれませんが日本人起業家と交流できる機会がかなり少ないですし、外国人の学生と企業との深い意見交換を行うチャンスが限られていると思います。京都にはイノベーションの大きなポテンシャルがありますので、ぜひ学生に対してサポートしていただけると幸いです。

- 「未来」と「文化」と「交流」についてそれぞれ一つずつお話しさせていただきます。現在、中小企業の経営者は概ね 60 代の方が非常に多く、事業承継の問題に対してどうするかということなのですが、私の提案は逆に、新しい起業家さんとのマッチングが必要だと考えています。事業内容について起業家さんが考えていることと、既存の中小企業さんの事業承継の中身が割と類似していて、知恵を出し合うことでお互いに良い相乗効果が出てくるのではないかと思います。すぐには解決しないかもしれませんが、それぞれの行く先がある程度見えてきたりもするかと思いますので、事業を分けずにマッチングすることも考えていったらどうかと思います。

また、農林水産業に関して、最近の商工連携では、要は畑で野菜を作る人と加工する人が分かれていて、それらの人達が連携しようという事業だったのですが、なかなかうまくいかないで、業者さんが 6 次産業化し、野菜を作るところから食品に加工するところまで全部やってしまうような施策が多くなってきました。この利点は、農業者さんが消費者を意識し、売れるものを作ることで、ニーズがわかってくると、出口となる消費者の方が見たりしますので、新規就農や家庭就農者がそういったニーズを掴みながら販売することもありますし、京都府の丹後農業実践型学舎でも非常に人が育ってきて、そこに定着してすぐに収益を上げていて、すごい成功例かなと思っていて、若い人はだんだん輸出の方にも目を向けていたりしていますし、家庭就農者さんをどんどん育成しながら、やっていっていただきたいと思っています。

また、食は文化にもなります。お祭りでの食は地域に根ざす食文化であり、政は農業から始まりまして、伝統というところがありますので、京野菜は世界でも非常に有名ですし、そういったところをもっと意識しながら、施策としていただきたいと思っています。

京都は学生の街と言いますが、学生が定着せずに大体が首都圏の東京に就職してしまうので、学生さんが住みたい街、また働きたい街にしないと、4 年間京都で過ごして就職は大都会へ行ってしまう、一過性で終わってしまうことが顕著に数字でも現れていますので、学生さんに京都で仕事してもらえよう頑張っていたいただきたいなと思います。

- 京都府内に本社のある企業が多く、観光資源も非常に多くあります。また、産業や文化、大学も多く様々な特徴のある街だと思います。東京では課長や部長が来ますが、京都であれば社長やトップが来ると言われる程に魅力的な文化があります。それを含め、京都では大きな企業が引っ張ってきたところもあるのだと思いますが、一方で 100 年、200 年を迎える歴史ある企業もたくさんあります。私は京都のこの強みを活かすのは横串を刺すことだと思います。その中の一つとして、今までは一企業と繋がっていたところを、業界団体とのつながりをもっと強化して横串を刺すということを行政がもっと手を打っていただくことで、人が足りないところへのサポートができないかと思っています。事業承継についても、企業団体から情報を得ながら、新たな後継者不足に対するサポートができないかなと思っておりまして、行政としては企業間で競争しているところにそんなことできないという事情もある

うかと思いますが、本当に不安なところについては、世の中全体で助け合うことができないかなと思います。

また、文化の継承や地域づくりについても、ちょうど文化庁の移転、あるいは万博があります。そういった意味では、コロナ禍ではありますが、京都は以前にも増して世界から人を迎えて、体感してもらわないといけないと思います。動画ではなく、京都に来て体感してもらうためには、企業や団体、学生、行政などがテーマ毎にお迎え隊のようなチームを作って、お客様をお迎えし、京都の魅力を発信することが、結果、交流型の地域づくりといったところに繋がっていくと思っており、チーム全員が専門家である必要はなく、いくつかのチームを立ち上げてそこで切磋琢磨して迎えることで、協力関係が出来て、今後にも伝わっていくのではないかと思います。

人口減少の対策で一番大事なことは、みなさんで助け合うということだと思います。そういった助け合いを醸成していくということについても行政が中心となってチーム作りをお願いできればと思います。そしてそのキーパーソンの活動の原点は学校だと思います。地域の学校もありますので、学校を1つの単位として、その中でしっかり地域の活動をしていくことが重要だと思いますので、ぜひ協力していただきますようお願いいたします。

- 伝統産業は、コロナで生活様式が変わってしまい、どのジャンルも大変苦戦をしております。コロナ禍でも回復したところがありますが、感染者数が増加していくと、またその影響が出てしまっているような状態です。その中で、全国の伝統工芸品が約200あるのですが、京都はダントツで数が多いです。もちろん歴史も長いのですが、その場に携わっている人も含めて、京都の文化の良さや強みを認識できていないというよりは、当たり前だと思っているのではないかと思います。当たり前だと思って日常生活に溶け込みすぎているから、アピールや情報発信をしません、他府県の方や海外の人にとってはそれがたまらない魅力になっており、日本のあらゆる場所から京都に憧れを持っていて、その良さが地元の人から発信できていないところが逆に弱みじゃないかなと思います。例えば、伝統工芸品が1つしかない東北のある県は、その1つを一生懸命アピールされており、目から鱗だった訳ですが、京都の伝統産業、特に西陣でもそういった文化技術の発信が本当にできていない。また、その作品・商品の良さをアピールするだけではなく、使うことによって得られる良さや強みのアピールも全然できていないと思います。これは、京都の伝統産業が今まで好調すぎたことにあぐらをかいているという気が非常にします。

もう一つは今流行りのSDGsについて、伝統産業ではるか昔から取り組んでいて、何を今さらという感覚になっており、どうしてそれをもっとアピールをしないのかなと思っていきます。団塊ジュニアの世代交代があらゆるところで起きておりますが、若い人達の中では、やはりそういった強みを生かさないといけないという話も増えています。しかし、まだお父さんの世代が活躍して、若い世代が活躍できてないということになっております。西陣も今年で名前がついて555年ですので、11月11日の西陣の日に、それを起点に色々なイベン

トをしますが、なるべくそういった当たり前と思っているところを発信させていただこうと思っています。そして、555年を起点に、これからの将来、まだ町屋が残っている西陣を、衣食住一体で職人の町というところをアピールして、西陣の町を活性化していけたらと思っています。それともう一つは産業ニーズへ繋がるのですが、西陣織の技術は世界一です。ところが、世界一という発信もあまりできてない。これを555年を起点に海外に発信していきたいと思います。

- 2点申し上げます。1点目は、「未来を拓く産業づくり」に書いてある「アートとテクノロジーを融合した産業の創出」というのが大変面白いというか、例えば、防災研究所では関東の専門家の先生方に来ていただいて、いかに分かりやすく、いかに届くようにお伝えするのかという視点で取り組んでいますが、京都は伝統産業をはじめ、そういったアートの観点から非常に色々なものがありますので、そういうものを活かして、関東のテクノロジーを変えていくということが新たなビジネスモデルになるかと思います。島根県の雲南市というところに来月も行くのですが、そこでは、少子高齢化が進んだ15年後の日本がそこにあるということで、そこで色々な企業がチャレンジできますということをして様々な企業が集まっています。もう少し先に進めて考えると、世界の25年後は日本にありますよということで、少子高齢化は、アジア、特に韓国では今後の大変な問題ですので、そんなことを考えてもいいのかなと思いました。

2点目は海外の方に京都に来ていただく際に、良いインターナショナルスクールがないというのが案外ネックになってしまっていて、神戸には良いものがあるので子どもを連れて来ることができるのですが、京都にもそういうものがないと、親としては心配があるので、国際的に活躍できる形を作っていくことが非常に重要な課題だと思います。

- 京都は学生の街で多くの大学生がいますが、大学へ行く4年間くらいを京都で過ごして、卒業したら故郷に帰る、素通りするというのが現実ではないかと思っています。せっかく4年間も京都にいていただくので、その4年間で色々な課題に取り組むというようなことを経験していただくことができれば、学生時代も有意義に過ごすことができるし、その後も京都に残っていくという形が生まれるのではないかと思っています。

京都の特色である伝統産業は残していかないといけませんし、農林水産業も含めて、後継者不足の要因の一つはやはりたくさんの方がいるのに、その人たちに府内産業のことを紹介できていないことが大きな問題かと思っています。伝統産業や、新しい産業もそうですが、スタートアップ支援や他の支援も含めて、学生を刺激するというか、そういった機会を手厚くするのが大事なことはないかと思っています。そして、その人たちが、約20年後の2040年にしっかりと京都で活躍していただく状況になっていくことが大事であると思っています。ただ、そういう問題はやはり人口減少、高齢化という問題が根底にありますので、現行の総合計画は共生や、新しいコミュニティのあり方がすごく大きなテーマになっていたと思いま

すが、高齢者を孤立させないことがまず重要になってくると思います。「安心」、「温もり」の部会でもお話がありましたが、高齢者の社会的参加をどのように進めていくかということも重要なテーマだと思っています。

例えば、地域包括ケアシステムは、年齢に関係なく1人1人が自分の住み慣れた町で活躍できるまちづくりをしようという考え方ですが、地域の中には、高齢者、働く世代、そして子どもたちがいます。高齢社会では例えば、高齢者のために働く世代が合わせるのではなく、地域として高齢者を見ていくことを考えるべきだと思います。そういったことを通じて高齢者が社会から自立できる社会的システムの構築が必要です。例えば、スポーツをしっかりやることによって、健康寿命の延伸を図れますし、高齢者にとって自分たちが参加する場所があるというのもすごく大きいことだと思います。子どもに対しては、子どもがいるから迎えに行かないといけない、子供の用事で働きに行けないという制限を受けるのであれば、その子どもたちを地域で支えるという仕組みを考えるということもすごく重要だと思います。子どもたちがこれからの社会を支えてくれるのは間違いないことですからその子どもたちも前述の学生と同じように教育の機会とか、例えば大学ではどんなことをやっているのかを知るような機会はすごく重要だと思っています。

やはりどうしても、今は皆が1人1人孤立していると思います。高齢者だけでなく隣の家が何をしているのかも分かりませんし、今は、マンションの表札に名前を付けている家庭も珍しいです。地域の交流がなくなっていると思いますので、意図的に交流の機会、コミュニティを作るということをしていかないと、せっかくの地域の力が発揮されないと思いますので、ここでそういうことを考えていくことも必要かと思っています。

- 京都府は、製造業の技術開発支援や、困ったときの受け皿は本当に充実していると感じています。コロナ感染拡大以降は私共の様な中小企業でもDX化が急激に進んできましたが、DX人材の育成は遅れていると感じています。行政でももちろん色々な力を入れていただいていると思うのですが、やはり更なるDX人材育成の支援や、デジタル化に伴うセキュリティの問題がこれからどんどん出てくると思うので、こういった機密情報セキュリティ安全対策についても同時に支援をいただけたらありがたいなと思います。

京都には特徴のある中小企業がたくさんあります。「草の根イノベーション」に関しては、色々なノウハウを持った中小企業もたくさんあるのですが、大企業と中小企業が自律的に連携するというやり方は、積極的には行われていないと思っています。海外進出についても、個々には対応していただけますが、大企業と中小企業が助け合って、色々な情報を交換できる仕組みがあると、中小企業としても海外進出しやすいのではないかと感じています。特に進出する地域性もありますので、地域ごとに区分して、連携できたりすると中小企業も海外進出のハードルが下がるのではないかと思います。

これからの問題はやはり人材不足であると考えています。当社では、来年4月採用の入社募集をかけ、特に理系の方に絞って募集したこともあったのかもしれませんが、応募は非常に

少ないと感じました。また、当社の社員の1割は海外の方で、日本人と同じように採用し働いていただいておりますが、今年は留学生の応募もなく、留学生の人材も減っているなど感じています。そういった状況から、特に中小企業では大企業と違ってこれから益々人材確保が深刻になり事業の継続も危ぶまれることもあるのではないかと懸念しています。また一方では、学生も中々就職先がないとも聞いていますので、そういった中小企業と学生、留学生のマッチングの仕組み強化にも力をいれていただければありがたいと感じております。

- それぞれの課題を本当によく考えてくださっていて、「未来を拓く産業づくり」の基本方針について、社会的・構造的な課題を解決していくということが書かれていましたが、本当にその通りだと思っています。根本的には人手不足があるので、構造改革を余儀なくされているという現状なのですが、次のステップに向かうための専門家の支援みたいなものを充実していただければすごくありがたいなと思っています。

ただ、京都市内には仕入れの事業者もたくさんおられますし、色々な意味でたくさんものが集まっていると思うので、そういったものをもっと地方でも享受できるようなネットワーク作り、場作りをしていただければありがたいなと思っています。最近、京都市内からも提灯屋さんや色々な面白い方々が地方にどんどん移住してくれてきていますので、そういったチャンスはかなり広がってきたかなと思っていますし、これがさらに加速されるとすごくありがたいなと思っています。全体を通して思ったのは、都会と地方の流動性をどうすればもっと高められるのか、全国に視野を広げなくても京都はすごい町だと思っているので、もっと地方と連携してさらに何か新しいものを生み出していくような取組ができればありがたいなと思っています。

最後に京都観光アカデミーの創設がありましたが、ものすごくいいなと思っています。特に、京都観光アカデミーに集う学生は、若くてフットワークが軽いし、すごく色々な場面でポテンシャルも高いのかなと思っています。先程の人手不足を解決する一つの糸口になると思っています。実際に芸術大学からアルバイトで来た学生は、観光に向いている学生がすごく多いように思いました。アカデミーはそういった意味ではすごく可能性、チャンスがあるのかなと思っていますので、ぜひ地方にもそういったチャンスがあるとすごくありがたいなと思いました。

- スポーツに着目すると、南部と北部ですごく格差を感じると思っています。友人も一生懸命バスケットボールをやっていますが、中学校に入るときに京都市内へ行こうかと言われてたりして、スポーツを本気で志してその可能性をさらに求めるとなると、北部は厳しいなと思っています。文化芸術も同様だと思います。

そういった意味ではプロチームが北部にやってくるとかも分かるのですが、日頃から指導者を各地域で育成する、または各地域に派遣するなど、地元企業が協力して、例えば指導者の人件費や生活していくためのコストをどう捻出していくかを考えるなど、指導者を育成・

派遣する仕組みができればすごくありがたいなと思います。そうすると、別にどこかに移住しなければならないのではなく、自分が生まれ育った地域に居続けながらも夢を持ち続けられるのではと感じており、どうすればもっと北部でも夢を持ち続けられるのかなということを考えていただけたらありがたいなと思っています。そういった中で、北部には廃校があります。特に運動場というのはとても大きな財産だと思いますので、廃校をうまく有効活用して、もっと気軽に使えるような、そしてスポーツを楽しめるような環境を整備していくことも大事なのかなと思いました。

もう一点、子供に関して考えると教育がとても重要だと思っています。教育分野でも、もっと企業と連携した地域活動をリアルに経験・体験していくというか、地域をより良くするための活動のプロセスに中高生ぐらいから参画していくことが重要だと思っています。北部は大学がないので、オンラインを使えばうまく交流できるようになってきてはいますが、日常の中で、大学生と連携してというところでは難しい部分があります。そういった意味でも、もっと企業と連携して、地域の活動に参画していく機会を作っていくことができればより良いのではないかなと思っています。

もう一点、先程から出ている人材不足に関しては、もちろん人材を確保する取組を強化していくことが大事だと思うのですが、日本全国で生産年齢人口が減少し、少子高齢化が進んでいく中で、人材不足は日本全国で起きていることだと思っています。そうすると、どうしても移住・定住支援だけではなく、外国人材などの採用も進んでくるとは思っているのですが、民間レベルでは、心のハードルを低くしていけるような国際交流の機会を子供の頃から積極的に取り入れていくことがとても重要ではないかと思っています。これに関してはオンラインを使えばいくらでも日本にいながら国際交流ができますし、一方でリアルに海外に行くという体験も子供たちにとっては、とても重要なのではないかなと思っています。そういった教育や子供たちに対する国際交流の機会を促進させていくこともとても重要ではないかと思っています。

- 農業は個人経営をされている方が多いですが、個人経営といっても、地域のために農業をされている方が多く、そういった点で、集落の連携が大変重要だと思っています。今集落が崩壊しつつある中で、いかに農地・農業を守っていくか頑張っているところは、維持・持続し、発展させていきたいと思っていますが、集落の維持・発展は大変重要なので、集落や研究機関が活発に連携していただいて、維持できるような農業の方向をきっちり計画に記載いただけると大変ありがたいと思っています。

また、100haという大きなメガ団地を作る事業があります。それも一つの考え方としてよいのですが、大規模な農家だけではなくて、家族で経営されている小さな農家もたくさんおられるので、そういった小さな農家もきちんと守っていけるような施策も、今後展開していただきたいなと思います。

全体的に見て、農業は絶対に必要な産業で、なくすわけにはいかないものです。農業がある



ことで、環境も守られるし、食料も確保できますので、そういった意味では、生業として農業をやられる方だけではなく、農業だけで生計を立てていない小さな農家も仲間に入れられるようにしていったら、すごくいいのではないかなと思っています。

● 産業、文化、地域にそれぞれ一言ずつコメントします。

まず産業ですが、これは強めるべきです。メタバースの取組には大変期待をしております、協力したいと思いますし、アートとテクノロジーの融合、これはもう世界的なトレンドであって、しかもその両方を有している都市はほとんどありませんので、ここは力を入れるべきだと思います。そしてもう一つの強みが左下にある伴走支援事業で、京都府では100年以上続く企業の割合が4.7%で日本一というデータがあります。しかも100年といわず500年、1000年と続く企業が出てくる世界でも例のない都市です。これがSDGsの「S (Sustainable)」の意味するところではないかと思っています。欧米型の資本主義とは違うサステナブルな価値を示すポップで新しい商品に強く光を当ててはどうかというのが一つです。

それから文化の資料の左下にVR・ARを活用した魅力発信とありますが、これは産業のメタバースと一体化すべきで、さらにそこから観光などのリアルにまきこんでいくという、つまりトータルで、横串の通った戦略を考えていただきたいと思っています。

3点目の地域ですが、大学と学生の力を活かしてデジタル化を進める方向に賛同します。特に大学の学生スポーツにはeスポーツを含めていただきたいです。ゲーム大国でありながら、インポート後進国だった日本がようやく立ち上がって、コロナの巣ごもりもあって、今すごく産業が大きくなっていますし、先程お話がありました亀岡スタジアムでも行われていて、しかも5Gで離れた場所でも遅延が少なく試合ができるようになりました。最近是指のゲームだけじゃなくて、身体を思い切り使うデジタルゲーム、フィジカルスポーツが大きくなってきていて、これが今後広がっていくはずで、世界に名だたるゲーム会社がある京都がメッカになって然るべきではないかと考えます。

● 私からは「交流による新たな地域づくり」について4点コメントさせていただきます。

1点目は交流について、これがメインなのですが、交流といってもいろんなレベルがあるかなと思っています。国際的な交流から、京都府と周辺との交流、市内とかのレベルの交流、さらに家族間のレベルでの交流までありますが、実はこれらの交流を支えるというのは非常に重要なポイントなのかなと思っています。そういった意味でレベルの違う交流のどれが欠けることなく、全部あるのがいいと思いますので、それを考えた方がいいのではと思いました。

2点目は、先程からの議論にもありますとおり、リアルでの交流と、色々な新技術を使ったバーチャルの交流を有機的にうまく連携していくことが大事だろうと思います。例えば最近、交通調査をすると、特に若い人が外に出ないといった話が出てくるのですが、でも実はバーチャルでは外と繋がっていて、それがきっかけでちょっと会ってみようとか、この地域

に行ってみようということが絶対出てくるはずですので、バーチャルとリアルとの連携がカギになるのではないかと考えています。そういう意味で言うと、移住者にも色々なタイプがあって、完全に拠点を移すだけではなく、週末だけでもいいでしょうし、夏だけでもいいといったように、多様な生き方、生活様式を支え、広い意味での関係人口をいかに増やしていくかが本当に重要ではないかと思っています。

3点目は、関係人口が増えてきたときに、地域や地方がどういう意味を持つかという、やはりそこに残って住んでおられる方々やそこにある資源をどのように考えるか、そういった意味で、地域資源をもう一度育成していくとか、その地域を誇りに思えるような教育は重要だろうと思っています。

最後に4点目ですが、それらを支えるのが新技術を含め、一つは交通ネットワーク、もう一つは通信ネットワークだと思っています。今回ここに書かれているのは、公共交通の利用促進が一つのキーとしてあるのですが、もう少し緩く捉えていただいて、リアルな移動モビリティと、バーチャルなモビリティを確保するという意味で、現状ある色々な交通通信ネットワークを最大限活用する交通政策が考えられたらいいかなと思っています。

- 産業、文化・交流、地域づくりの3つをうまく繋いで何かを作り上げることが重要だと感じました。
- 行政が関与して、まずは地域づくりや地域間連携に取り組むという意見がありましたが、行政が地域に働きかけて、組合のようなものを作るのは難しいのでしょうか。昔は地域社会で互いに助け合う、あるいは競争し合うということがありました。
- スポーツ分野では学校スポーツの地域移行が叫ばれ、医療分野では地域包括ケアの推進等が重要と考えますが、行政の施策で地域コミュニティを育てようとしても、行政だけでは実現できない部分があります。また、地域性の問題もあります。2年半前に新型コロナウイルス感染拡大の影響により急に学校が休校になった時、京都市内の中心部では、保護者であるエッセンシャルワーカーの皆さんが仕事を休まざるを得なくなり、かなり大変な状況でしたが、北部一帯では、近くに住む祖父母に面倒を見てもらい、大きな問題にはなっていないと聞きます。  
スポーツの地域移行については、京都市内では、学校が統廃合されても区民運動会が残っているところが多く、全ての世代が参加でき、子供の見守りにもなり、健康増進にも役立つことから、こういったものをモデルに何かできないかとも考えますが何かアイデアはございますか。
- スポーツの地域移行における課題は、指導者不足と財源の問題の二つだと思います。指導者については、大きな競技団体から小さな団体まで、押しなべて全てが指導者を育成してい

くことは難しいので、サッカーであれバスケットボールであれ、指導者のライセンス制度をもっと学生にもオープンにすることにより、例えばスポーツ関係の大学や、部活に取り組んでいる学生が、週1回、地域でスポーツを教えてもいいのではないかと思います。財源については、参加者からどの程度会費を集められるのか、どの程度公的資金を集められるのかを考える必要がありますが、地域移行に賛同する企業から企業版ふるさと納税を集めている地域の事例もあり、こうした取組も併せて進めていけばどうかと考えます。

また、過疎地域ほど、地域移行の難易度が高くなるので、例えばオンラインで指導するのも一つの方法だと思います。大学の教員が町内会と協議して地域のスポーツ大会を実施している事例もありますが、交流が深まり非常に盛り上がるし、互いを知ることができるので、地域づくりの点でも重要なツールになると思います。

- 中小企業と大学生との就職マッチングに取り組んでいますが、今なお就職した学生の定着率は低い状況もあります。大学生の府内定住が進めば、学生消防団員の増加など、地域コミュニティの課題解決の一助になると感じています。龍安寺参道商店街では、今年から立命館大学の学生が商店街の夏祭りの運営を始めるそうです。こうした取組が、地域の課題解決のヒントになったり、事業承継に繋がる可能性もあります。大学生の力をどのように活かしていけばよいか、何かアイデアはございませんか。
- 大学生同士のつながりも希薄化していますし、大学間や地元企業との交流の場も、学生にはあまり知られていません。中小企業が学生を受け入れ、アルバイトでの雇用を通して交流を図るといったことも必要かもしれません。
- 留学生の観点では、イベントに参加しようと思って検索しても、情報が全て日本語なので参加するのが難しいと思います。やはり言葉の壁がすごく大きいので、もっと英語等での積極的な発信が必要だと思います。また、日本人と留学生との交流も重要であり、例えばスタートアップの場合、自分が日本語を話せなくても日本人の共同作業者とともに国際的な組織を作ることができると思いますが、現時点では企業間の交流機会も少ないと感じています。
- 大学では地域連携活動がたくさん行われていて、こうした活動を通じて地域とのつながりが生まれると感じています。例えば、京都市動物園と学生が1年を通して一緒に企画・運営する取組がありますが、これが地域活性化につながり、地域と学生の連携を深めていると思います。
- 言葉の壁は大きいですが、何度か集まっていると、下手な英語や日本語でも会話ができるようになります。1年を通して地域との交流に励んでいる団体を府が応援していくことで、

その団体を軸として新たな連携も生まれてくるかもしれません。

- 地域と大学生との連携について、アメリカのビジネススクールであれば、地域や企業からの課題を受け、それに学生が取り組むことで卒業単位が得られることもありますが、日本においても、大学・大学院と地域との連携のようなものを必須科目にできないのでしょうか。そうすれば、意欲のある学生だけではなくて、半ば強制的にでも地域連携を大きく進めるきっかけになるのではと思います。
  - 学生との地域連携について、今年度新潟県新発田市で大学生 24 名が賛助会員として青年会議所に入会したという事例がありました。この動きを受けて京都の青年会議所が、地域課題を解決するための活動経費を負担し、新潟県の学生と活動をともにする中で、そのうちの学生 1 名が京都の青年会議所への就職内定が決まり、また 1 名は観光関係で京丹後でインターンシップが決まったと聞きます。これは青年会議所の事例ですが、これに限らず、地域をより良くしようと考える団体や企業と学生がうまく繋がっていけると良いと思いました。
  - 1 つ目は、「未来を拓く産業づくり」について、スタートアップも大事ですが、京都の強みは広範な広がりを持った中小企業のネットワークであり、このネットワークでは草の根イノベーションとでもいうべき自律的なイノベーションの動きがあります。この自律的な動きを公的に支援する施策こそが、これから京都が既存の産業の潜在力を生かしながら成長していくために重要なことだと考えます。また、特に京都の基盤産業である飲食・宿泊・観光、この基盤産業の構造改革を推進する自律的な努力＝草の根イノベーションへの資金面・ソフト面の強力な公的支援が重要と考えます。さらに、大手と中小の連携こそ京都の強さであり、この強さを生かして中小企業の事業構造の変革、新事業の創出、後継者育成につなげる工夫が必要です。福祉・介護・保育といった産業を少子高齢化や女性活躍を支えるインフラ産業と位置付けて強化していく視点も必要です。これらの産業がロボット化やデジタル化のための投資に耐えられるような規模の集約、マネジメント力の強化などを進めていくことを支援する公的施策が必要ではないでしょうか。また、新産業のキーワードは地球温暖化対策であり、地球温暖化対策の事業・産業を興すことはデジタル化を進めることであり、一石二鳥の成長戦略であると考えます。最後に、中小企業を対象にした人材教育は、公的施策として実行していくことが、不可欠であると考えます。
- 2 つ目は、「文化の継承と創造」について、自らの地域の文化や歴史を知ることがグローバル化の基本と考えますが、京都が産公学労一体となって、また地域一帯となって、コロナを乗り越えて来ることができたのは、「京都の文化」が真ん中にあったからであり、こうした視点を持って文化を守り育てていくことが大事です。